# 全盲の母の記録

宮下忠子

白髪の老女は、潮風にほつれる髪をかきあげながら、波のざわめきに聞き入っていた。日中というのに人影はなく、さざ波の音だけが海辺に立たずむ彼女を取り囲んでいる。彼女は景色を観ることはできない。……

# 堀木文子の半生

晩聲社

著者■みやした・ただこ■
1937年熊本県生まれ。明治大学文学部史学科卒。東京・品川高校教諭を経て，都立社会事業学校卒。現在，東京都城北福祉センター医療相談員。
主な著書
『山谷日記』『日向に坐って地球の回る音をきく』（共編著）『山谷・泪橋』（晩聲社）

全盲の母の記録・堀木文子の半生　定価＝1200円

1980年12月25日　初版第1刷

著　者　宮下忠子
装　幀　杉浦康平＋鈴木一誌
発行者　和多田 進

発行所　株式会社　晩聲社
〒101　東京都千代田区神田駿河台3-2　山崎ビル
電話（03）255—4014／0030
印刷　福音印刷株式会社
製本　ナショナル製本
用紙　共和洋紙店

©Tadako Miyashita
Printed in Japan
＊乱丁落丁はお取り替えいたします。

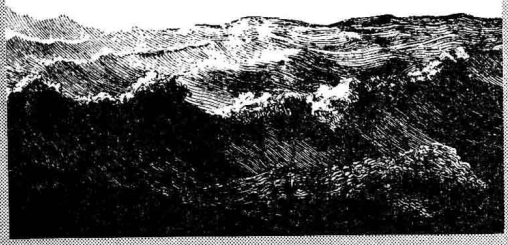
# 全盲の記録

宮下忠子

自転車をはね、悲鳴にほどけた髪を
かきあげながら、流のうわめきに
聞きとっていた、日中というのに
人影はなく、ささ波の音だけが
海辺に立たずむ彼女を取り囲んでいる。
彼女は表情を読むことはできない……

# 堀木文子の半生

晩聲社



按摩師修業　82
独立への夢　88
頼母子講　91
結婚　96
出産　100
夫から逃れて　104
愛児の死　108
離別　114
第四章　訴訟……117
海の温泉　118
生家跡　125
母子心中を考えて　132
決意　138
二審判決への怒り　146
第五章　旅の終わりに……151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

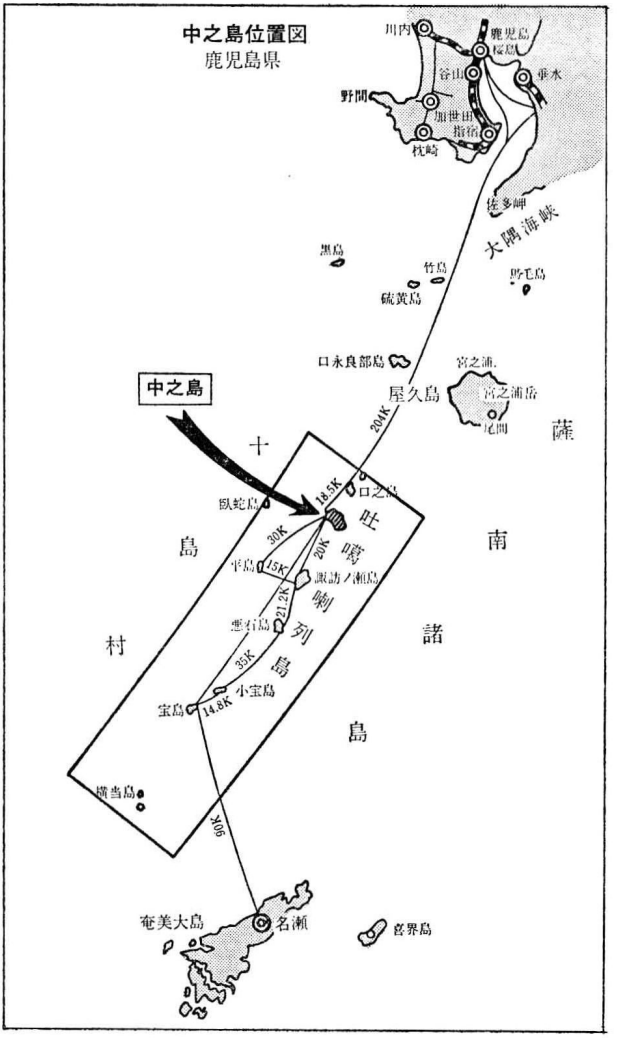
帰途へ　152
資料……163
堀木訴訟と社会保障　164
堀木文子さんの証言　174
堀木訴訟関係年表　188
あとがき……197

# 全盲の母の記録・堀木文子の半生

目次

吐噶喇の海で——まえがきにかえて……9
第一章 望郷……13
神戸の朝 14
頬をつねって 17
鹿児島港 20
船旅 28
中之島 30
「めくらってなんや！」 36
母の死んだ日 41
第二章 再会……47
おヒデさん 48
嫁と姑 58
おすみおばさんの家 65
売られていた娘 75
第三章 半生……81

# 全盲の母の記録・堀木文子の半生


中之島位置図
鹿児島県
川内
鹿児島
谷山
垂水
野間
加世田
指宿
枕崎
佐多岬
大隅海峡
黒島
竹島
硫黄島
吟味島
口永良部島
宮之浦
屋久島
宮之浦岳
尾間
中之島
204K
十
口之島
臥蛇島
18.5K
吐
島
30K
20K
噶
南
平島
15K
諏訪ノ瀬島
喇
21.2K
悪石島
列
村
35K
島
諸
小宝島
宝島
14.8K
島
横当島
90K
奄美大島
名瀬
喜界島
薩

## 吐噶喇の海で——まえがきにかえて

——聞こえるでえ、この波の音や……。小さいころ、この海でよう遊んだもんや。いまこうして立ってるとなあ、あのころのまんまや……。

白髪の老女は、潮風にほつれる髪をかきあげながら、波のざわめきに聞き入っていた。日中というのに人影はなく、熱帯の湿った真夏の微風と、さざ波の音だけが海辺に立たずむ彼女を取り囲んでいる。

面積約二七平方キロの小さな島の周囲に造られた車道を、ひとまたぎするとそこは吐噶喇の海なのだ。茶褐色の岩々が、夏のおだやかな波に洗われ、丸味をおびた姿でつづく。

「なつかしいなあ、なんやしらんけど胸がしめつけられるようや……」

だが、彼女は景色を観ることはできない。見えない目を濃い紫色のサングラスでかばい、水平線へと透きとおるような色白の顔を向けて立ちつくす。真昼の太陽が、彼女の小さな影をつくり、小柄な彼女をいっそう小さく見せる。

粗目のような砂が、小さな波にすくわれ、はなやいだ悲鳴があがる。いま彼女は、遠い昔の



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

童女の世界に立ち帰っているのであろう。

彼女——堀木文子さん六〇歳。三歳で失明し、一二歳で母を喪い、一家離散した一三歳の秋、隠れるように島を去って、四七年ぶりに生まれ故郷・鹿児島県の離島、中之島の海に帰ってきたのである。

私が〝堀木訴訟〟の原告である堀木文子さんを知ったのは、一九七四年の初夏、再就職をめざして東京都社会事業学校に学んでいるときであった。休憩時間に配られたビラに、堀木さんが一九七〇年に兵庫県知事と国を相手取って起こした裁判の説明と、彼女の写真があったのである。

一三歳で生まれ故郷を去った堀木さんは半生を按摩師として生きてきた。この間、二度の結婚によって五人の子どもの母親になったが、うち三人とは不幸にも生・死別し、全盲の母子家庭という苛酷な条件のもとで二人の子どもを育ててきた。しかし生活に窮して、父親と離別した子どもの保護者を対象とした児童扶養手当を受給するため、福祉事務所に申請。ところが堀木さんが障害福祉年金を受給していることを理由に却下されてしまったのである。

両親がそろっていても、父親が障害者の場合は障害福祉年金と児童扶養手当を併給できるにもかかわらず、母子家庭で、母親が障害者の場合は併給は認められないということであった。

堀木さんはこの、法律による差別に対して訴訟を起こしたわけである。堀木訴訟の意義については、社会事業学校の小川政亮先生の講義で教えられていた。しかし、ビラの写真ではあったが、原告・堀木文子さんの顔を見たのはこれが最初であった。

写真の彼女は、白い杖を握って立ち、サングラスに遮られた目は、まるで向けられたレンズを見透すように真正面を向いていた。強めの陽ざしが陰影をきわ立たせ、いくらか大きめの唇がやさしくほころんで、柔和さの中に意志の強さを感じさせる女の顔であった。

「この小柄な女性が長い裁判を?」

それがビラを手にしたときの私の感想であった。それからすでに五年、堀木さんはいま最高裁の判決を待つ身だが、訴訟を起こしてから一〇年になろうとしている。この間に私は、東京都城北福祉センター（いわゆる〝山谷地区〟）の非常勤職員となり医療相談員として、激しい労働と貧困、アルコール中毒などに病む人たちとの日常を送っているが、福祉の仕事に携わる一人として、また子どもを抱えて働く女として、堀木さんにこだわらずにはいられなかった。

晴眼者ですら、母子家庭を取り巻く状況は厳しいのに、全盲の彼女が二人の子どもを抱えて戦後を生きぬいたことの厳しさは私の想像を越える。ことに、第二審の際の堀木さんの証言記録を読んで、激しく心をゆさぶられた。法廷での限られた時間の、限られた質問に、もたつきながらも、苦難の生活と福祉行政のありのままを、控えめに素朴に語っていたからである。以

後私は、視力障害者の彼女が、女として、妻として、母親として生きてきた人生のありのままを知りたいと思いつづけてきた。それは、私の仕事とも私自身の生き方とも無縁ではないはずだからである。

一九七九年六月、私の自分勝手な思いが人を介して堀木さんに伝えられると、思いがけずも、見ず知らずの私に堀木さんは承諾の返事をくれた。だが、いざとなると私には仕事があり、堀木さんは神戸市在住の身。堀木訴訟の集会が開かれて会う機会はあったものの、ゆっくり話し合う時間もないままに別れてしまった。

私は、堀木さんとの再会までに、まず彼女の生まれ故郷の中之島へ行ってみようと考えた。そこは堀木さんの人生の原点であると同時に、共通の話題から心がふれ合えるかもしれない、との思いからである。私のこの話が堀木さんに伝わると、「私も行きたい。これまでずっと、帰ってみたいと思いつづけていたから……」といい、彼女の熱い望郷の思いが伝えられてきた。一三歳で島をあとにして以来、一度も帰ったことがなかったのだ。

「一緒に行きましょう」

話は決まった。

こうして、彼女にとっては四七年ぶりの帰郷が実現し、私にとっては丸四日間、彼女とともにすごす時間が与えられることになったのである。

# 第一章　望鄉

## 神戸の朝

堀木さんとの吐噶喇への旅は決まったものの、堀木さん個人に関する私の知識は皆無に近い。裁判における彼女の証言記録から、裁判にいたる動機の一端をうかがい知ることができただけである。そのわずかな知識だけで、初の二人きりの旅に出ることへの期待と緊張を胸に、一九七九年七月一二日早朝、私は新幹線で神戸に向かった。

はじめての神戸の朝は想像していたよりも騒音が少ない。人影もまばらな街に朝のひんやりとした風が吹いてくる。地図をたよりに堀木さんと待ち合わせることになっている兵庫県障害者連絡協議会事務所へと急いだ。

駅に近い商店街の一角のビルの一階に、目的の事務所を見つけてホッとした。灰色のビルの通路に自転車やダンボール箱が置かれて通路を狭くしている。そこを通りぬけて突き当たりを左におれると鉄の扉があった。ノックするとドアの向こうで男性の小さい声がした。遠慮がちにドアをあけると、雑然と置かれた印刷物の向こうのテーブルで男の人が書きものをしていた。その背後に事務机が二つ向き合って置かれている。そこにこやかな表情の全盲の若者が腰か

けていた。

「堀木さんですか、いま金沢さんが迎えにいっています。あがって待ってあげて下さい」

忙しそうに紙の上に定規をあて、線を走らせていた人がいった。名前を中川さんといった。文学堂という印刷・事務機等の品を売る店を営んでいるという。一見まったくの健康体にみえた。全盲の若者は豊田君といった。言葉のはしばしにはちきれそうな若さと力強い明るさがあった。

「暑いなあ」

しばらくして、開け放されたドアの向こうから、聞き覚えのある堀木さんの声が近づいてきた。横には堀木さんをいたわるように、この事務所の事務局長の金沢釉子さんが立っていた。堀木さんの着ている白地に茶系の文様が散ったブラウスには見覚えがあった。四年前に私が手にしたビラにあった写真の彼女のブラウスであった。私は一瞬なつかしさを覚えた。左手に買物用のナイロン布製の袋を持っている。それはさしてふくらみをもたず軽そうであった。中には下着一式、洗面用具、あとタバコなどが入っているという。荷物はそれだけであった。

「堀木さん、ええなあ、旅行するんやてなあ」

「おれも旅行したいなあ」

中川さんと豊田君が前後していった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com